理事長コメント：

文部科学省高校生用啓発教材「健康な生活を送るために」の中の「２０．健やかな妊娠・出産のために」に関する意見

文部科学省が、本年８月下旬に全国に配布した高校生用啓発教材「健康な生活を送るために」の中の「２０．健やかな妊娠・出産のために」の項の一部の記載に対し、種々の方面から意見が発せられています。そこで、長年、日本における生殖医学に関する諸問題に対し医学的立場から積極的に関与してきた日本生殖医学会は、本件に関する学術団体としての意見を示す必要があると考えますので、以下に掲載します。

平成 27 年 9 月 7 日

一般社団法人日本生殖医学会
理事長　苛原　稔

「妊娠のしやすさ（人口学用語では見かけの受胎確率）と年齢」のグラフは、O’Connor 氏の論文（Kathleen A. O’Connor、Darryl J. Holman、James W. Wood. Declining fecundity and ovarian ageing in natural fertility populations. Maturitas 30 ; 127-136, 1998）にある年齢に伴う見かけ上の受胎確率の変化を示したグラフである。また、このグラフは Wood 氏の論文（James W. Wood. Fecundity and natural fertility in humans. Oxford reviews of reproductive biology 11 ; 61-109, 1989）をもとに作成されたものでもある。このグラフは、年齢に伴う受胎確率の低下を説明するために、長年用いられてきたグラフであり、このグラフが示す年齢に伴う受胎確率の低下は、最近明らかになってきている生殖医学に関わる種々のエビデンス（①年齢による妊娠率の変化：Dunson DB, et al. Hum Reprod. 17:1399, 2002. ②年齢による卵子数の変化：Baker TG: Am J Obstet Gynecol.110: 746, 1971. ③年齢による日本の生殖補助医療の成績：http://plaza.umin.ac.jp/~jsog-art/2012data.pdf など）と呼応するものである。

さらに、①②③は年齢に伴う個々の事象の受胎確率の変化を表すグラフであるが、これに比較すると、O’Connor 氏のグラフは見かけの受胎確率に関わる事象の全てを含んだ受胎確率の低下を表しており、高校生が学習するうえでも重要であり、かつ容易に理解できるグラフでもある。本会としてもこのグラフを

推奨する。

また、啓発教材の限られた紙面で人口学の用語である「見かけの受胎確率」を用いて高校生に十分理解してもらうのは難しく、あえて「妊娠のしやすさ」という言葉で表現したのは適切である。さらに、妊娠にはさまざまな要因が影響を与えることは当然のことであり、そのことを前提として「妊娠のしやすさ」という言葉で表現することも、医学的には何ら問題ない。このグラフを用いて若い時期に年齢に伴う変化を学習することは、その後の人生設計を考える上でも適切であるといえる。

妊娠出産は個人の価値観や選択に委ねられていることは言うまでもないことである。しかし、妊娠出産を希望する男女にとって、近年の本邦での晩婚・晩産化の傾向はReproductive Health and Rightsの観点からも健全でなく、生殖・周産期医療に大きな負担を及ぼしており、また個人にとっても多大な損失である。この原因として、若い時期にヒトの妊娠する能力の年齢変化について、十分学んでいない点も一因として指摘されている。今回、文部科学省・内閣府が共同で制作した高校生の啓発教材「健康な生活を送るために」の中の「２０．健やかな妊娠・出産のために」の項で「妊娠のしやすさ（人口学用語では見かけの受胎確率）と年齢」を記載したことは、本邦の生殖医学に関わる学術団体としてもとても喜ばしいことである。本会としてもこの知識の早急な普及に関し、協力を惜しまないところである。またこの教材が十分活用され、より健全な妊娠・出産が促進されることを願ってやまない。